









路の聲嚴かに青源寺門より練り出たせる有様は實に藩政中深尾家全盛の昔を憶ひ出て觀る者をして坐に今昔の感に堪へざらしめたり而して行列の次第及び人名は左の如し

幕持 一人 町小使 一人 庄屋 山崎伴吉

先箱 一人 足輕 山崎茂 鐵砲 一人  
先箱 一人 足輕 和田朔郎 鐵砲 一人

白熊 一人 步行 川添亥平 步行 小村庄吉 步行 宮崎篤  
白熊 一人 步行 水野安足 步行 大石虎之助 步行 下方庄三郎

飛鳥 一人 徒目付片岡登 扨 從高根因平  
手替 一人 扨 從桑名加持子

扨 從竹村予太郎 扨 從濱口恒十郎 扨 從川田豐太郎  
**召駕**

扨 從川村理 扨 從竹村貞次郎 扨 從上村豐太郎

扨 從森岡研策 扨 從竹林長太郎

扨 從西村龜太郎 扨 從門脇一驅 草履取 一人

扨 從堀見眞三 扨 從山口廉太郎

供頭 上村貞守 手 明 一人 持 槍 一人  
手 明 一人 長 柄 一人

辨當 一人 茶道頭 加用 信齋 引馬 二人 具足櫃 二人



兩掛 一人

合羽籠 一人

合羽籠 一人

合羽籠 一人

竹馬 一人

供槍十餘人 供長刀 一人

押足輕

加納義量  
近澤茂實

醫師

堀見久庵  
(駕)

藥籠 一人

長刀 一人

近習目付

向阪馬三郎  
(駕)

合羽籠 一人

槍

一人

側役

佐藤徳教  
(騎馬)

若黨 一人

槍 一人

具足櫃 一人

右行列の服装を記別すれば

箒持町小使以下道具持は股引脚半一刀或は無刀庄屋は

立付帶刀

下横目は看板襟羽織立付帶刀赤房十手捕繩

歩行 徒目附は背割羽織伊賀袴帶刀

陸尺は深尾家慣用の看板

乗駕以外の者は悉く一文字笠

記念碑除幕式

深尾家第址記念碑は深尾神社の下同第址上の道傍に建設したるを今回大祭の當日除幕式を行ふ事とし午前十時建設委員其他の人々碑の周圍に參列群集し委員堀見瀨助氏碑文を朗讀し併せて建設の顛末を報告して式を



終れり  
 練り踊  
 高岡郡別府村別枝産土神社の祭典に古來より踊りたるものにて慶長年間同村の姓不詳與作といふ者遠州秋葉神社より傳へ來りしものなりと云ふ藩政中同村は深尾家の領内なりしを以て景肅宮(深尾家祖神)の例祭にも來りて此踊りを演じたる事ありし緣故に依り此回同地の神官日浦大海氏に交渉して奉獻する事となりしなり其隊伍行列左の如し  
 立 天狗先掃一人奉納幟一人獅子二人 神社惣代一人  
 神職二人 鉦一人 幟一人 白熊二人

黒熊二人 臺笠一人 立傘一人 惡魔掃一人  
 鳥毛二人 鐘一人 太鼓一人 手拍子一人  
 笛一人 音頭一人 螺貝一人 槍一人  
 先拂一人 中太刀一人 小太刀一人 中太刀一人  
 小太刀一人 中太刀一人 小太刀一人 小太刀一人  
 中太刀一人 小太刀一人 槍一人 後拂一人  
 惡魔拂一人 幟一人 棒持二人 取締四人  
 右服装は野袴狩衣様のものにして兜を着したる杯其演技も亦他の花取踊等とは一種其趣を異にせり演技中最も人の目を惹くものは槍投げの藝なり壯士二人相向ひて一の大鳥毛槍長二間餘なるを交るゝ投げて之を受



くるなり其距離五六間を隔て音頭歌音曲の節奏に應じて練り踊りつゝ之を投ず幾回を重ねるも双方共に一も受け誤る事なし其傍には中太刀小太刀棒遣等の踊をなす其節奏はチヤン／＼チキリチヤンチキリといふが如し今音頭歌の一二を記す

サラバ　太閤秀吉様の出世を尋ねる今世のむかし  
ハ　ヨ　イ　／＼　ヤ　ア　ト　ナ　ー

國は尾張の中村生れ羽柴を名乗りて天下を握るア  
ヨ　ー　イ　ー

佐川の殿様和泉守は近江源氏の其一流で世にも名  
高き名家生れア　ヨ　ー　イ　ー

流し踊

此の踊は高岡郡斗賀野村永野なる嶺岩神社の祭典に享保年間より踊り初めたるものにて壯士白鉢巻に紺袴を着し二十四人を一隊として各貳尺斗りの眞劔を閃めかし太鼓の節奏に依りて入り亂れ／＼舞ひ踊る其狀頗る勇壯なり此踊維新の後神佛の差別を立てられたる節音頭歌の文句中佛語の交りあるを以て明治四年の頃より廢絶し居たるを此度深尾家の大祭に再興せしなりこれも藩政中景肅宮の例祭にも獻じ來りたる縁故あるにや  
るなり  
踊り歌の一二を擧ぐれば



源氏平家の二道に花も咲き分け源平の旗の模様  
に咲き分けて赤と白との二天色よ

君の御前に召し出され雨の降る夜の物語り渡邊の  
綱鬼神のありかを獨り見に行羅生門  
花取踊るは是も亦斗賀野村より來り獻す踊子三十人計り孰も美麗  
なる揃の服装に鶏の毛を以て飾りたる笠を戴き太鼓の  
節奏に依り抜刀にて踊る觀る者喝采せり  
南無舞手踊るは同郡尾川村より來り獻す此の踊は最と古體なるもの  
に鐘太鼓を鳴らし其歌曲頗る優美なり音頭は大なる團

扇を揮ひ節奏を指揮するものゝ如し珍らしき觀物なり

藝妓踊るは佐川町の藝妓三十人計り新作の歌曲に依りて手踊をな  
す揃の服装は白の狩衣に野袴を着け冠りは脊に負ひ一  
刀を腰にし扇を持ちて舞ひ踊る其狀稍活潑に第一節を  
終り第二節は櫻の造花第三節は梅鉢の紋を染出せる小  
旗を持ちて嬋娟を競ひ肉聲の美音三絃笛太小鼓と相和  
していとも優美に舞踊れり新作の祝歌

第一節 研きにときたる劍太刀 土佐高岡の郡なる  
佐川の里は其むかしの 慶長六年の仲の秋



國主のきみより國老の  
入城ありし頃よりは  
領内安く治まりて  
朝霧山のきり深き  
生茂りゆく民草の  
榮ゆるまゝに諸人の  
いらかつらなる家々の  
第二節  
四時の眺めいろくの  
咲の盛は霧生關  
花の中にもさくら花  
色香に霞む春の野に  
むれつゝ遊ぶ樂しきよ

深尾の殿に賜はりて  
三百年の其あひだ  
文化あまなく武威高く  
惠の露にうるほひて  
其なりはひは年月に  
集ひて市をなせし  
かまどのけふり賑はへり  
花の中にもさくら花  
色香に霞む春の野に  
むれつゝ遊ぶ樂しきよ

暑さを知らぬ氷室とも  
清き流れは名に高く  
はや齒にひびく岩清水  
秋は月見に柳瀬橋  
清き鏡の淵の面  
瓢の酒を酌みかはし  
小富士の峰を今朝見れば  
年豊なるしるしをと  
又來る春を小指折り  
第三節  
開くる御世はさまぐに  
いひはやされし西溪の  
立より見れば掬ぶより  
汲む人たえぬ夕涼み  
下行く水にかけ映り  
黄金の波のよるくは  
うたふ聲々賑はしき  
降り積む雪の白妙を  
老もわかきも喜びて  
待つ面白の冬景色  
かはり行けども今に猶



變らぬものは人なるを遠きむかしを忘れねば  
 代々に受けたる恩澤の 深尾の神を祭らんと  
 古き神樂を初めとし 踊のおきの種々や  
 深尾の君の其むかし 上洛ありし行列の  
 形の外に海武士の 甲冑着たる騎馬の列  
 實に勇ましく賑はしく 花火の音の四方八方に  
 ひびき聞えて諸人は 吾おくれじと集ひ來て  
 神の御末は千代八千代 古城の山の若松の  
 常磐の榮え祈りつゝ 源遠く年を経て  
 流れ絶えず水清き 佐川の里の萬歳を  
 祝ふ今日を樂しけれ

高知市の自轉車曲乗家松岡熊喜氏は當日前記各種の餘  
 興終りて後松崎新道數丁の間に繩張りをなし障害物飛  
 越、一輪疾走、其他得意の曲乗り十技を演じたるに孰れも  
 珍らしき事とて非常の喝采を博したり

柳瀬公園夜踊角舩の景況  
 一日の夜柳瀬公園のコリヤセ踊りは係りの委員數日前  
 より其準備を爲したれば當町は云ふに及ばず近傍各村  
 より來り集る者引も切らず踊り子の數も一千人以上に  
 及びければ豫定の踊場に滿ち溢れ三重の圓形を成すに  
 至れり踊子服装の一斑を記さんに花笠を冠るあり緋袴



を穿つあり紅白の裳綾羅の袖三々五々揃ひの姿にて出  
立つ者幾群れなるを知らず無数の點火と相映し實に花  
の如く錦に似ていと目覺ましく覺えたり又其傍に角觥  
場を設けて東西の力士數十番の勝負あり場の周圍も亦  
見物人山をなむ勝時の聲歡呼の聲と相和して最も壯觀  
なりし午後十一時過る頃各無事に解散せり

二 目祝賀會の景況

午後第三時より松崎橋に於て佐川町創立紀念の祝賀會  
を開く場の入り口に大緑門を造り祝場の周圍には幔幕  
を繞りす來り會するもの百有餘名席定まるや委員長伊  
藤徳敦氏演臺に就き祝辭を述べ次に委員副長堀見瀨助

氏は重孝君、精吉郎君、隆太郎君、田中子爵を初め各地より  
發送せられたる祝書祝電(昨日の天祭及び當日の祝賀會  
に係るもの)を併せて四十餘通を朗讀し續て堀見恭作、竹  
林長太郎兩氏の祝詞演舌あり祝宴を開き煙火狂火藝妓  
踊等の餘興ありて歡呼湧が如く佐川町の萬歳を唱へて  
散會せしは午後八時に近き頃なりし伊藤氏の祝辭を左  
に記す

祝辭演說案  
抑吾が佐川町創立より四五十年の前永祿年間土佐の國  
は一條家の時代に於て松尾の城主中村氏の城下にあり  
き其時三野部落にも松尾城の別堡ありしと云ひ傳へ今



其舊址たるを知るべきものは往々田地の字に存するのみ故に當時其の附近に市街の形をなしたる人家杯もありしならん又松尾山下の内原に一筋の市街ありしよしにも傳ふれど今は分明ならず彼の永祿の頃は長曾我部氏の武威強く兼併の志あり已に五郡を定め勢に乗じて高岡郡の數城を攻め降し遂に其兵の佐川に向ふや中村氏一戰して走り降る長曾我部氏乃ち其老臣久武氏をして松尾城を守らしむ後水利に乏しきを以て春日川の小流を隔てたる南當市街上の山に築きて移りたりと其後長曾我部氏は豊臣氏に降り豊臣氏亦亡びて徳川將軍の世となり山内一豊公に土佐全國を賜はり慶長六年入

國せられ同年深尾重良君山内公より高岡郡の北部十八個村一萬石の卦邑を賜はり八月十九日を以て佐川に入城せられしより従て家臣の人々の城下に住する者多きに依り公私の需用に供する物品賣買及び器物製造等の利便を計る爲め商工業者相集りて市街の形を成したるより創立せしものにして三百年前の當時を回想すれば山間數十戸の茅屋に過すして其商工業の景況も亦未開にて寥々たりし事ならんと雖も已に市街を形ち造りたれば佐川の城下町にて有しなり然に深尾君入城せられしより十五個年の後元和元年徳川幕府一國一城の制を布かれたるに依り城を毀ち城山の東麓に第宅を築き移



住せられしなり其建物中に年頭を初め祝日等に家臣拜賀の禮を行ふ表廣間と稱へし室の太なる柱は城の古材を用ひし者なりとて都で鉋を加へず舞手斧削なりしは予の目撃せし所なり當時築城工事の素材なりしを想ふべし爾後國老の封土に居住せらるるを土居と稱へしより佐川土居町の稱ありし創立以來三百の星霜を經過するに時代を逐ひ當町の商工業漸く隆盛に赴きたる其順序的の舊記は見るを得ず亦古老の口碑に傳るも聞くを得ざれども佐川城の追手口は奥の土居なりしと傳ふるに依れば其追手城門外なる上町四辻の東西及び裏町筋に市街の形をなし東町の東端には家臣の人々の邸宅あり

りて家中町と稱へし者ありしに過ぎず後年に至り漸次に新市以北に開け行きたるものなるべし尤も裏町は古市町の稱あるに依れば或は久武氏の頃より既に市街の形ありしや分明ならず上町筋は昔より百十屋敷と稱へし宅地は明治維新の際まで深尾家の無免地にて家臣の拜領屋敷と同一になしありしなり是れ創立最初の開拓市街なるを以て商業獎勵の爲に無免地となしありしならんと察せらる又東町に屬する新町出來町新丁等は其小字に依ても皆後年に開けたるを知るべし中に就て新丁近傍は最も後に開けし者にて今を距る八十餘年前までは田畑或は竹藪等なりしを文政三年深尾家の公費を



以て開拓し家屋の建設ありて商工業を營む者に貸し與へ市街の繁昌と事業の發達を奨勵せられたり今に新丁の家屋中數戸一棟に成れるもの、現存するもの是なり是時其工事費を支ふる爲め深尾家に於て紙幣を發行せられたり所謂佐川の赤札なる者是なりし當時の通貨は幕府の金銀銅の三種にて他に紙幣なかりしに依り佐川領内を限り通用の免許を受けたる者に拘はらず旅人行商等の携帶に便なるを以て領外の國內は勿論隣國の松山及び宇和島地方までも行はれたりと聞く亦以て深尾家の威勢と信用との如何に強く且つ厚かりし一斑を知るに足るべし諸君中の家或は今に深尾家の紙幣の筐底

に現存するもの有べし其濃桃色の札には必ず文政二年の發行を印せり此の如く商工業の奨勵のみならず夫れ夫れ係の官吏を命じ且つ各村には庄屋老組頭等の地下役を置き領内一般の農業を勵まし殊に教育は文武の良師を聘し又家臣中よりも師たるべき者を擧げ用ひられ最も盛に家臣の學藝を督勵せられたりき近く維新の大改革に際し深尾家も亦領土を奉還し他に移住せられたる今日に至るまで逐て繁昌を加へ縣内に於て高知市を除き教育其他の事業各町村の下に落さる以所の者は皆是れ三百年來深尾家の餘澤に依ると云ふべし昨日は即ち深尾君佐川に入城せられし陰曆八月十九日に相當



せるを以て諸君と其紀念の祭典を行ひ舊恩を忘れざる  
 の萬一を表し爰に本日を下して當町創立紀念の祝賀會  
 を開き自今永々歲月を経るに從ひ吾が佐川町の益隆昌  
 の域に進まんとことを祈り冗長なる蕪言を述べた祝辭に  
 代へ諸君と共に萬歳を唱へんとす

關 犬

二日午前七時より柳瀬公園積に於て之を催す豫て廣告  
 案内もなしありし事故東西遠隔の郡村よりも其道を好  
 む人々は我後じと愛飼する所の猛犬を曳き來る者夥く  
 見物人も亦場の周圍に充滿せり場は土俵を以て高く積  
 み其上に竹柵を繞し相對する兩方に開き戸を設け其所

より双方の合せ犬を入れて閉鎖するなり同時に兩犬主  
 も柵内に入りて各己れが犬の名を大聲に連呼して其犬  
 の勢力を助く但犬に手を觸るゝ事を嚴禁す其狀怒るが  
 如く狂するに似たり兩犬は奮闘咆哮流血淋漓觀る者を  
 して壯と呼び快と呼ばしめ又或は酸鼻せしむ時に勝負  
 を判定する者ありて勝犬には賞品を與ふ此の日數番の  
 勝負ありたる中に無鑑札の犬を柵内に入れたる者あり  
 として警官の爲に解散を命ぜられしは遺憾なりき

煙火狂火

煙火は春日川の北供養石にて晝夜打揚げ狂火は夜中祝  
 賀會場の附近にて發火せしむ其種類は文字の燒貫き(祝



三百年祭鯉の瀧昇り地雷火其他數十種夫れく仕掛の巧みなる観る者拍手喝采して奇と呼び妙と呼べり

二日の青源寺

午前九時より青源寺に於て昨日來の來賓及び委員の人慰勞談話の會を催す其席上の裝飾并に器具排列の景況を左に記す

第一席 優待席

掛幅 明李在の畫絹本大幅子猷訪戴之圖 香爐 青磁

花瓶 古銅 挿木芙蓉菊花

梨子地塗料紙硯箱違ひ棚に置く

第二席 活花 主任 千家流桑名可平

掛幅 戴文進絹本大幅人物畫 置物 三聖像 (磁器)

片側活花十數瓶を陳列す

第三席 煎茶 主任 青源寺

掛幅 雲谷等顔達磨 花瓶 高麗青磁 挿不老長春

香爐 古銅長方式 涼爐 白泥三峯爐

湯罐 花鳥紋琉球窯 茶心壺 古錫壺式

茶量 古竹刻文字 水注 青磁太鼓式

巾筒 白磁圓形 茶銚 梨皮泥

茗縵 十錦手 托子 紫檀木葉式

果盃 萬曆磁 萍盃 有紋古銅

烏府 古編竹副羽箒火必 硯 青端溪



墨 方子魯 墨床 嵌玉紫檀

筆 萬曆牙管并螺鈿管三枝 水貯 花紋磁

卷軸 釋南海畫贊三十六名士冊子 黃檗獨吼十六羅漢畫贊

如意 蓮花式 席 紅毛氈

石 古谷 水

副席 茶心

掛幅 隱元禪師書青源寺開元 青花磁大瓶 捕雁來紅及秋草數種

堆朱 柄拂子

佐田町内兩日の景況

十月二日は早朝合圖の煙火空中に轟くと共に孰れも夫れくの準備を整へ午前六時を期して祭典係りを始め

係りの委員及び餘興行列等に加はる人々は我後れと豫定の場所に參集せり當日町内は毎戸に深尾家の紋章梅鉢を赤地に白く染出たせる小旗を軒端に掲げ春日川を隔てたる堤上にては絶えず煙火を打揚げたれば人々は早朝より競ひ立ちて狂するが如くに見受けられたり斯くて午前八時に至れば佛式の祭奠終り餘興の行列は青源寺門外より列を整へ別枝練り踊を眞先きに續て騎馬武者列次に深尾家の主洛行列に擬したる一列其後へには數十名の人々各麻上下を着し兩刀を帯び上町通外東町及び朝霧山なる深尾神社に參向せり參拜者は舊臣の輩は勿論佐川尋常高等兩小學校の職員生徒又



近村よりも小學校職員の生徒を率ゐて來り拜するもの五六校其他老幼男女の餘興見物を兼ねて參詣する者幾千人なるを知らず社殿の附近は場所狹隘なるに因り佐川高等小學校體操場(神社に近きに因る)に舞殿を假設して古風の神樂を献す(別枝練り踊を率ひ來る所の神官數名にて之れを奏す)傍ら各種の踊をも同所にて演ずるを以て見物の人々は場の内外に滿ち溢れ後手なる山腹に至るまで人を以て填められたり各種の行列組一同は高等小學校内にて午食を終り午後一時の頃より同校を出て市街を西に押し行き柳瀬に至り又松崎磧及び尋常小學校體操場にて種々の餘興有るを以て到る所人山な

らざるはなく街衢に填咽して人車の往來を妨るに至る以て入出の多かりしを知るに足れり  
 二日祝賀會の當日は早朝より鬪犬見物の爲め柳瀬公園に來り集る者數百人又午後は祝賀會場の盛況餘興の藝妓踊煙火狂火等を見んば松崎町より其附近に集る老若男女其數を知らず片町の人家は二階より檐下に至るまで人を以て充たされ立錐の餘地なきに至れり昨今兩日は幸にして天氣快晴且つ氣候も好時節なりければ珍敷き騎馬及上洛等の行列別枝練り杯の餘興ありし事として數里の遠邊を隔たる他の郡村より人出多かりし故今回の賑ひは實に佐川町未曾有の盛況と云ふべき







祝書

東京佐川會  
幹事

和田 稻吉

同

仁井田

明神 時長

一日電報

神式祭祝電

東京

深尾 隆重 孝君  
連名  
渡邊 精吉 郎君

佛式祭吊電

同

同上

神式祭祝電

大阪

深尾 隆太郎君

佛式祭吊電

同

同上

神式祭祝電

東京

田中子爵 同夫人  
同令嗣 連名

佛式祭吊電

同

同上

祝電

東京

東京佐川會員

同

津山(作州)

深尾 重城

同

同

同

同

同

同

同

大阪

堀見 克禮

同

京都

横川 彌太郎

同

大阪

和田 完

同

日光

濱口 守助

同

浦和

伊藤 德定

同

大阪

上村 信誠

同

東京

麗澤 舍

二日電報

祝電

大阪

深尾 隆太郎君

同

東京

深尾 重孝君  
連名  
渡邊 精吉 郎君

同

同

田中子爵 同夫人  
同令嗣 連名



祝電  
同

東京 東京佐川會員  
日光 濱口守助

五十四

2/6/34  
梅

の

薫

附錄終

明治三十七年三月十五日印刷  
明治三十七年四月二十日發行

定價金七十錢

高知縣土佐國高岡郡佐川町東町百五十七番屋式

著者 武藤厚馬

同縣同國同郡同町西町七十四番屋式

發行者 森崎久吉

東京市京橋區州間堀一丁目一番地

印刷者 竹尾幸次

東京市京橋區州間堀一丁目一番地

印刷所 松下活版所

高知縣土佐國高岡郡佐川町西町千六百七番地

發行所 永田虎市



新嘉坡 檳榔嶼 怡保 芙蓉 馬六甲 吉隆坡 芙蓉 馬六甲 吉隆坡

新嘉坡 檳榔嶼 怡保 芙蓉 馬六甲 吉隆坡 芙蓉 馬六甲 吉隆坡

芙蓉 馬六甲 吉隆坡 芙蓉 馬六甲 吉隆坡

芙蓉 馬六甲 吉隆坡 芙蓉 馬六甲 吉隆坡

芙蓉 馬六甲 吉隆坡 芙蓉 馬六甲 吉隆坡

芙蓉 馬六甲 吉隆坡 芙蓉 馬六甲 吉隆坡

芙蓉 馬六甲 吉隆坡 芙蓉 馬六甲 吉隆坡

芙蓉 馬六甲 吉隆坡 芙蓉 馬六甲 吉隆坡

芙蓉 馬六甲 吉隆坡 芙蓉 馬六甲 吉隆坡

芙蓉 馬六甲 吉隆坡 芙蓉 馬六甲 吉隆坡

芙蓉 馬六甲 吉隆坡 芙蓉 馬六甲 吉隆坡

芙蓉 馬六甲 吉隆坡 芙蓉 馬六甲 吉隆坡



79  
334







026035-000-4

79-334

梅の薫

武藤 厚馬 / 著

M37

ADC-3678.





